

博士論文の要約

ジョン・キーツにおける理想の詩的世界
—過去の詩人たちからの受容と変容—

児玉 富美恵

本論文はロマン派詩人であるジョン・キーツ (John Keats, 1795-1821) と過去の詩人たちとの影響関係を分析することによって、キーツの精神的形成過程とキーツの求めた理想の詩的世界を考察するものである。高等教育を受けていないキーツにとって、過去の詩人たちは詩作活動における師であったと言える。本論では、主にエドモンド・スペンサー (Edmund Spenser, 1552?-1599)、ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616)、ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-1674)、トマス・チャタトン (Thomas Chatterton, 1752-1770) を取り上げ、キーツ自身と彼の作品との関わりを分析する。

第一章の「キーツの「詩人」への目覚め」では、最初に、キーツの生きた時代はフランス革命 (1789-1799)、ナポレオン戦争 (1796-1815) に代表されるように、激動の時代であったことを鑑み、当時の社会情勢を概観する。次にキーツの生まれ育った環境に注目する。1815年、キーツは詩人として生きていく決心をするが、ここに至るまでの過程を彼の先輩、友人との関係を中心に検証する。キーツが、<詩人>を意識し始めた頃の関心の対象はスペンサーである。「スペンサーに倣いて」(‘Imitation of Spenser’, 1814) などスペンサーに関連する作品を分析し、キーツの詩作態度を探求する。また戦争や宗教、植民地政策によって、自国意識が芽生え、イギリス国民に<英国らしさ> (Englishness) の概念が生まれた時期でもある。その概念がキーツの作品ではどのように表現されているかを分析し、今後の詩人形成に<英国らしさ>が大きく関わっていることを考察する。

第二章の「キーツとシェイクスピア」では、キーツが書簡や作品の中でシェイクスピアについてどのように語っているか、彼のシェイクスピアへの思いを分析する。二つのソネット「海に寄せて」(‘On the Sea’, 1817)、「『リア王』を再読して」(‘On Sitting Down to Read *King Lear* Once Again’, 1818) において『リ

ア王』 (*King Lear*, 1604-1605) との影響関係を、物語詩『エンディミオン』 (*Endymion*, 1817) において『あらし』 (*The Tempest*, 1611?)、『夏の夜の夢』 (*A Midsummer Night's Dream*, 1594-1596) との関係を中心に分析し、詩作上シェイクスピアがキーツに与えた要素を考察する。キーツがこの偉大な詩人に深く共鳴していく契機は批評家・随筆家であるウィリアム・ハズリット (William Hazlitt, 1778-1830) の影響も大きい。1817年12月27日頃の弟ジョージとトムに宛てた書簡で示された「消極的受容力」 ('Negative Capability') の思想もハズリットのシェイクスピア論に負うところがある。シェイクスピアに関して、キーツがハズリットから学んだことを「消極的受容力」の思想の観点からも考察する。

第三章の「キーツとミルトン—キーツの「驚異の年」を巡って・第一部一」では、キーツの「驚異の年」と言われる1818年9月から1819年9月までの作品に着目する。まずオード「ミルトンの髪の毛を見て」 ('Lines on Seeing a Lock of Milton's Hair', 1818) や書簡からキーツのミルトンに対する敬愛の思いを探る。キーツは1818年秋から『ハイピリアン』 (*Hyperion*) に取り掛かるが、1819年4月に中断する。同年7月、『ハイピリアン』の改作『ハイピリアンの没落』 (*The Fall of Hyperion*) を創作し始めるが9月21日に創作を断念する。この時期はキーツのミルトンへの思いが冷める時期である。二つの『ハイピリアン』における文体の変化、書簡に示されたキーツのミルトンへの言及の変化を分析する。物語詩『レイミア』 (*Lamia*, 1819) は『ハイピリアンの没落』とほぼ同時期の作品であり、ミルトン色の濃い作品である。1818年秋から1819年秋にかけて書かれたこれら三作品に焦点をあて、キーツがミルトンから離れた理由を探求する。

第四章の「キーツとチャタトン—キーツの「驚異の年」を巡って・第二部一」では、「驚異の年」におけるミルトンからチャタトンへの移行期に注目する。まずソネット「おお、チャタトンよ！あなたの運命はなんと哀れむべきことか！」 ('Oh Chatterton! how very sad thy fate', 1815)、書簡体詩「ジョージ・フェルトン・マシューへ」 ('To George Felton Mathew', 1815)、『エンディミオン』の献辞などからキーツのチャタトンへの思いを確認する。1819年9月21日の友人ジョン・ハミルトン・レノルズ (John Hamilton Reynolds, 1794-1852) への書簡で、キーツはチャタトンを「イギリスの言語において最も純粋な作家」 ('the purest writer

in the English Language') と絶賛したあと厳しいミルトン批判を展開し、『ハイピリアン』の断念を明言する。この突然のようにも思えるミルトンからチャタトンへの関心の推移を分析する。キーツの時代に芽生えた〈英国らしさ〉の概念が、この時期のキーツにも作用しているかどうかも含めて検証する。先の書簡と同時期に書かれた「秋に寄せて」(‘To Autumn’, 1819) はミルトンからチャタトンへの関心の移行を如実に示している作品である。チャタトンの悲劇『武人イーラ』(*Aella*, 1768) と「秋に寄せて」を比較検討する。

第五章の「キーツの理想の詩人への挑戦—‘gradus ad Parnassum altissimum’を求めて—」では、まずキーツの創作活動における最後の時期の作品、史劇『ステイーヴン王』(*King Stephen*, 1819) と風刺詩『鈴つき帽子』(*The Cap and Bells*, 1819) に注目する。これらの二作品を執筆している頃の 1819 年 11 月 17 日に書かれたロンドンの出版業者ジョン・テイラー (John Taylor 1781-1864) への書簡において、キーツは「最も高いパルナッソス山への階段」(‘gradus ad Parnassum altissimum’) を求めるという詩作に対する最終的な方向性を提示している。したがって、『ステイーヴン王』と『鈴つき帽子』において、集大成としての要素が発見される可能性も考えられる。また『鈴つき帽子』とキーツの生涯最後の作品「将来、多くの知識を蓄えた賢人が」(‘In after time a sage of mickle lore’, 1820) は、スペンサーが『妖精の女王』(*The Faerie Queene*, 1590-1596) で用いたスペンサー連で書かれている。キーツにとってスペンサーへの回帰は、何を意味しているのかという観点で、スペンサーの果たしている役割も考察する。

第一章のスペンサーから第四章のチャタトンに至るまで、各章で検証してきた過去の詩人たちとの関わりは、キーツの詩作活動において、「消極的受容力」の思想を表現するために最も適したスタイルを模索する過程でもあった。「秋に寄せて」については第四章において、チャタトンとの観点で考察をするが、第五章では、社会的、政治的な観点で再解釈する。それと同時に、これまであまり顧みられてこなかった 1819 年 9 月以降の最後のステージに注目することによって、キーツが過去の詩人たちからの受容と変容を経て、「消極的受容力」の思想を表現するために求め続けた理想の詩的世界を論じる。そして、最終的にキーツが目指していた詩人像は如何なるものであるのかを結論付ける。